
あの日、あの場所で、私は女子園児に恋をした。

ガオ（蛾雄）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日、あの場所で、私は女子園児に恋をした。

【Nコード】

N4743P

【作者名】

ガオ（蛾雄）

【あらすじ】

社会に疲れたサラリーマンが、幼稚園児に恋をします。

夜遅くまで仕事に打ち込んだ後、帰りの電車に揺られていた。

押し潰されそうになるほど混んでいる車内。

私と同じようにブラック会社に勤める企業戦士たちの表情は、相変わらず疲労の色に染まっていた。

終電の窓からみえる真っ黒な夜空は、まるでこの社会の闇を映しだすかのよう、どこまでも果てしなく広がっている。

不意に車内が左右に揺れた。もし初めて電車に乗る人間なら「脱線するんじゃないか」と思うかもしれないほどの揺れだった。ただ、毎日のように会社に出かける社会人からすればその無表情を崩すほどの出来事ではなかった。乗客たちはカーブの遠心力により一斉に傾くが、まるで慣れているかのように素早く体勢を持ち直した。

その偶然、隣でつり革に掴まり立っている男の表情が視界に映った。立派な背広を着たサラリーマンで、なにやら携帯電話の画面をみつめたまま笑みを浮かべているのだ。

（いったい、なんだろう？）

そう不思議に思い、携帯電話を持つ彼の手に向けてさりげなく視線をずらした。覗き込んだ画面には、まだ幼い女の子写っていた。きつと七五三だろうか？ 可愛いピンク色の着物を見にまとつて無邪気にピースをしていた。

おそらく娘なのだろう。

彼の和らげに微笑んだ表情は、愛してやまない我が子を見守る明らかでそれだった。

それが私にとっては印象的だった。

はたして、娘とは何なのだろうか。

妻のお腹に赤ん坊が宿って以来、すぐに別居してしまった私にとって、娘を持つ父親という心境がいまいち理解できないのだ。

それはきつと、幸せな日々なのだろう。

家に帰れば可愛い子どもが抱きつき「おかえり、パパ」なんて言
って迎えてくれるのかもしれない。

しかしそんなホームドラマのような家庭を、私は知らないのだ。

私は電車を降りると、駅の付近にあるバス停に向かって走った。

そして発車ぎりぎりの所を駆け込み乗車。車掌の傍迷惑そうな表情
を尻目に、私は空いている座席に腰をかけた。

落ち着かない日々。

もしあの日、妻と別れてさえいなければ、今ごろ幸せな日常を送
れていたのかもしれない。

しかしそれは儚い夢に消え、残業帰りの電車の中で眠りながらそ
んな幻想を夢見ているのが現状なのだ。

人生とはいったい何なのか。

そんなことすら考える余裕もなく、ただひたすら仕事に打ち込み、
働き蟻のように会社に貢献していくだけの毎日。

「自由が欲しい」

ぽつりと呟いたその台詞は、白く曇った窓ガラスに反射して返っ
てきた。

全てを捨て、躓いたあの日から人生をやり直したい。

いつしか、私はそんなことを考えるようになっていた。

バスを降りた後、初春の肌寒い風を受けながら、住宅街の狭い路
地を歩いた。

既に深夜。辺りは闇に包まれ、電灯の明かりだけが前を進む頼り
だった。

しばらく歩き続けると、大きな公園のある場所が見えた。
そう、あの場所だった。

あの日、あの場所で、私は女子園児に恋をした。

日曜の朝、公園の古びたベンチに腰をかけ、今朝の朝刊を大きく広げた。

私は新聞を読むふりをしながら、視線のピントを前方にあるブランコの方に合わせた。

そこには、キャツキヤと無邪気にブランコを漕ぐ女の子の姿があった。

柊あゆか。お友達からは「あゆちゃん」と呼ばれ親しまれている。あゆちゃんも休日はいつも公園で遊んでいる。何人かの子どもに混じって、娘ざかりの桃色のスモッグを着て楽しそうにブランコを漕ぐその姿は、まるで自由の楽園を駆け回る天使のようだった。

広場を走り回るたびに揺れる、短めのツインテール。混じり気一つない、明るく無邪気な笑顔。輝く未来を信じてやまないその姿に私が魅了されるのに、そう時間はかからなかった。

私が欲していた自由を、彼女は持っていた。だから羨ましく見えただのかもしれない。あゆちゃんに出逢ってから、私はこの公園に通うようになっていた。

そして次第にその感情は形を変えていった。

胸の高鳴り。息苦さ。心の奥底で渦巻くこの感覚は、もはや一人の女性に対する愛情だった。

気づいたときには、彼女に恋をしていた。そう。気付かないうちに、咲くことのない蕾のような歪みきつた禁断の片思いに、私は染まっていた。

休日である日曜日とはいえ、まだ園児である幼い子どもが一人で公園に来れるわけがない。いや、もしかしたらこの広い世の中、自分の子どもを一人で外に出す親がいるのかもしれない。ただ私の知

っている一般常識では子どもを公園に行かせる場合、少なからず保護者が同伴するものだ。

そう、居るのだ。

公園の隅にある、もう一つのベンチ。そこには、遊び回る我が子を見守る母親集団がいた。

大体髪を染めた若い主婦で、中にはまだ十代なんじゃないかと疑ってしまうほどの若々しさを放つ女性も混じっていた。

一体どんな会話をしているのだろうと気になることもあるが、それよりも気になるのは彼女らの目だった。下校中の小学生に声をかけるだけで町内の不審者事案に上がるこのご時世で、同じ曜日の同じ時間に、ましては子どもをジロジロと見つめる男がいれば、不審者扱いで通報されるのも当然かもしれない。

だから私は、週ごとに変装を繰り返してここに来ている。先週はスーツ姿に着替え、まるでリストラを受けたサラリーマンのように何ともいえない哀愁を漂わせていた。さらに先々週は、上下ジャージだった。あくまでフレッシュな青年を装って、付け焼刃で覚えた太極拳を披露していたような気がする。そのさらに先週はホームレスだったか。

そんなふうに幾度と無く変装をしてきたのだけど、顔を隠すための帽子は欠かせなかった。顔を覚えられては変装をする意味がないからだ。

そんなわけで今日は、杖と茶ゴケのコートにハット帽をかぶり、少し渋めの老人を装ってきた。もちろん足腰を悪くしている設定で、この公園にやってきてベンチに座る際にもスローな動作でいることを怠らない。なぜ足を悪くしている設定なのかというと、私の中で老人は常に膝の調子を悪くしてなければいけないという印象があったからだ。

おそらく、いつか私も膝を悪くして杖をつくのかもしれない。しかしそれは遠分先のことになるだろう。

そんなことを考えていると唐突に老人になった気分になり、目先

にいるあゆちゃんが自分の孫のように思えてきた。

しかし実際、自分に孫ができるのかを考えると、突如それは虚しいものに変わった。

視線の先に、あゆちゃんが笑っている。

その笑顔を目に映しながら、私はこれからどうすればいいのかわからなくなった。

夕暮れ時の住宅街。私は一軒の家の門に立ち、資料を片手にはさんだ。

そして身だしなみをチェック。シャツの襟を整え、ネクタイをキツと絞める。その後、何度か深呼吸を繰り返してから、私はおもむろにインターホンを押した。

しばらくしてから、「はい、どちらさまですか」という中年女性の声がスピーカー越しに響いた。

「あ、あの、わたくし新型給湯器の紹介をさせて頂いている者ですが……」

「要りません」

言い切る前に、ぶつりと音声が切れた。

はあ……と溜め息が漏れた。もう何度目になるかも分からない門前払い。もし今日中に一軒も顧客が増えなければどうなるだろうか。そう考えるだけで、胃が重たく感じる。トボトボとした足取りで、次の住宅へと向かった。

「気合が足りないんだよ!!」

小さなオフィスに課長の怒鳴り声が響き渡った。その場の社員たちは皆一様に身を竦ませたが、いつものように見て見ぬふりをした。「なあ、俺がいつも教えてるよな？」

それは社内における教訓。商品が売れないのは商品への愛が足りないからだとか、門前払いされるのは笑顔が足りないからだとか。

以前からセールスの才能がないと言われてきた。今月のノルマ表の棒グラフを見れば、月末だというのに自分の列はたった三センチほどしか伸びていない。逆にその隣の新入社員の列は自分の何十倍もの顧客を増やしていた。ただ一人、自分だけ圧倒的に顧客が少ないのだ。

「おまえが努力してるのは知っている。だけどな、どれほど頑張ろうが、結果を出さなきゃ意味がないんだよ」

結果の部分を強調して言い放った。たしかに給料を貰っている以上、利益を生み出さなければこの業界でやっていける筈がない。いつまでも結果が出ないようなら首を切られるのが関の山なのだ。

その後、自分の欠点をことごとく説教された挙句、結局その日は終電を迎えるまで残業をさせられた。

一人暮らしのアパート。

疲れ果てた私は、靴を脱ぎ捨てると玄関に倒れこんだ。

嫁と住んでいた家を出て行つて以来、ずっとここに居座っている。ブラック会社に勤めて数年間。ノルマに追い立てられる日々。精神的に狂いそうになりながらも、なんとか仕事を続けることができた。

別にこの仕事をやりたかつたわけではない。ただ流されるように就職した先がこのセールスマンという職業だった。

才能がないのは、分かつている。理解していながら、それでも続けるしかなかった。私にはそれしかなかったからだ。

シャツをハンガーにかけた時、電話の留守電ランプが光っていることに気づいた。

再生ボタンを押す。一件のメッセージ。

それは、母からだった。ちゃんと食べているのか。いつこつちに帰ってくるのか。金に困つてないのか。

そして、今も嫁とは上手くいつてないのか。

母の気遣いは有難かった。だが留守電に応える気力はもはや無く、

私はそのまま布団に向けて体を引きずらせた。

次の週の日曜日。私はいつものように公園に出かけようとしていた。もちろん、あゆちゃんに会うためだった。正確には会うのではなく遠くから見守っているだけ。どれだけ辛い仕事で精神を病もうが、この日がやってきてあゆちゃんの笑顔を見れば疲れなんて吹っ飛んでしまうのだ。そう思うと公園に行くのがワクワクしてたまらなかった。

そういうわけで今日はどんな変装をして行こうかと鏡の前で迷っている、ベッドの枕元にある携帯が鳴った。一件の着信。

「今すぐ来い」

電話をかけてきたのは会社の上司で、内容は急な仕事が入ったから時間までに遅刻せず来いとのこと。つまり休日出勤ってやつだった。

先ほどまでのテンションは一気に落胆し、私はがっくりとフロアリングの上に膝をついた。

そしてしばらくの間うなだれた後、黙ってスーツに着替え、鞆を持って出勤するのだった。

——先方が待っている、遅刻は絶対に許さない。

今朝の電話でそう付け加えられたのを思い出す。

ブラック会社における休日出勤は別に珍しくない。特に業績は常に最低で、新入りに対しても地位の低い私は、社内ではモノのように扱われるのだった。

もし今回遅刻して上司の機嫌を損ねばどうなるか。潔く首をはねられるかもしれない。今年に入ってから新卒内定率三十パーセントにまで沈み、過去最低記録を上回った氷河期だ。まともな就職先なんてありえない。

そう考えると恐怖に身体が震えた。運良く入れたような会社だ。もしここをクビになれば、路頭に彷徨うのは目に見えていた。

「う……」

気がつくとは私は猛烈な嘔吐を覚えていた。

思い返せば昨日の昼間から何も食べていないのだ。ここのところ仕事で忙しく、家に帰ってからは疲れて夕飯を食べることも忘れていた。そもそも食事を摂ることが頭からすっぱりと抜けていたのかもしれない。きつと朝食を食べなかったのもそのせいだ。このままでは会社に付く前に倒れて死んでしまいそうだ。あるいは駅のホームでふらついて線路の上に落っこちるかもしれない。

どちらにせよ、何かを食べないといけない。

私は近所にあるコンビニに向かおうと進路を変更した。そして住宅街の道の角を曲がった時だった。

「んっ、うっ、ぐすん……」

一人の女の子が道端で泣いていた。それは正しく私が恋焦がれているあゆちゃんだった。

その瞬間から私は空腹感を忘れ、あゆちゃんの元へ駆け寄り、彼女の肩をがっしりと掴んでいた。

「どうしたんだい!？」

あゆちゃんはかなりびっくりとした様子で、私の顔をまじまじとみつめていた。泣く子も黙る、というのはこういう事を表すのかも知れないと思った。

「んっ、うえっ、あの、あのね……」

あゆちゃんは泣きじゃくりながらも、事情を説明しようとしていた。

私は興奮していた。それはあゆちゃんと初めて会話できたことに對してではないし、彼女の柔らかい身体に触れたことでもない。

言い直せば、焦っていた。怒りにも似た感情だった。彼女の身にいったい何が起きたというのか。いったい誰にお菓子を差し出されて、どう脅されて、どの部分を触られたのか。

すると、あゆちゃんは口を開いた。

「ねこちゃんがね、ニャーニャーってね、でね、追いかけてね……」
ようするに、近所の野良猫を追いかけて迷子になった。それだけのことだった。

私は安堵し胸を撫でおろしたが、あゆちゃんは泣き続ける一方だった。

「そっか。じゃあ、オジさんがあゆちゃんの家まで連れて行ってあげるよ」

しまった、と思った。彼女にとって初対面であるはずの自分が、どうしてあゆちゃんの名前を知っているのか。しかも家族や友達からよく呼ばれている愛称で。

しかし、あゆちゃんはそのようなことは気にせず「ほ、ほんとあ？」と視線を私に向けていた。

私はその真っ直ぐな希望の眼差しを受け止めては、まぶしいな、と思った。それ以上に、彼女を助けることができる喜びを感じていた。

しかし、時間は待つてはくれなかった。腕時計をめくると、時間はとつくに遅刻ぎりぎりのラインに迫っていた。このままではバスにも電車にも遅れてしまう。上司からどんな咎めを受けるのかも分からない。

それでも私に考える余地はなかった。あゆちゃんが困っているのだ。こんな見知らぬ土地まで来て、追いかけた猫ともはぐれて、大好きな親の元から離れて泣いているのだ。

「それじゃあ、行こっか」

そんな彼女を見過ごすことなんて、できるはずもなかった。

「仕事をナメてるのか？」

先方との契約が終わった後、すぐに私は応接室に呼ばれた。

上司はカンカンに怒っており、その表情はいつにも増して強張っていた。

「えっと、猫を追いかけて迷子になった女の子が……」

「そうか。猫を追いかけて迷子になったのならしょうがないな」

私は、え、あ、いや、と意味を成さない言葉を繰り返した。

上司は私の肩をポンポンと二回押し出すように叩き、「今日はもう帰っていいよ」とそれだけ言い放った。

「しかし、まだ残ってる仕事が……」

「いいから帰れって。ほら」

声色は低かった。

胸に向かって鞆を放り投げられた私は、その場を「……失礼します」と言い、逃げ出すように会社を出て行った。

クビになるかもしれない。

次の週の日曜日、ジャージ姿にキャップ帽を深く被った私は、拝むように顎を両手に乗せ、いつものベンチに腰をかけてあゆちゃんを眺めていた。

遅刻を犯したあの次の日から、社員たちの態度はひどく冷たいものだった。

押し付けられる仕事も、いつもより減っているような気がした。

まるで居なくなるのを予定している社員への配慮のように、私に対する周りの目線は変わった。

終わるのかもしれない……。何もかも。会社をクビになり、食糧を買う金も無くなり、そのうち家賃を払えなくなってアパートを追いやられるのだ。

すぐには尽きないだろうけど、そのうちそうなるような気がした。いつかホームレスのように路上で生活する日が来るのかも知れない。あるいは実家に籠り、近所や親戚から冷たい視線を注がれるような肩身狭い生活を送ることになるのかもしれない。

いつにもなくネガティブな思考に陥る自分。

それを前に、こちらを覗き込んでいる小さな影の存在に気がついた。

「あ、やっぱりお兄さんだ!!」

その場にしゃがみ込んでいたあゆちゃんは、相変わらずいつまでも変わらない眩しい笑顔を私に向けていた。

「え……」

私はポカンと口を半開きにしたままだった。

その一方で、ぞろぞろと、その場に小さな園児たちが集まってきた。

「この人がね、この前わたしの家に届けてくれたんだよ」

頬を赤く染め私を指をさして、可愛らしい声でみんなに説明するあゆちゃん。周りの子どもからは「えーっ!?!」「すごい!!」と反応の声が上がった。

「ねえ、どうしてあゆちゃんの家がわかったの?」

別の子からのその問いかけに対して、私は曖昧な応えを漏らす。すると何処からか大きな声で「きつと“ちょーのうりよくしゃ”なんだよ!!」という推測が上がり、「あー、そういえばこの人テレビでみたことある」という謎の人違いをされた挙句、マジシャンで稼いでいるだとか、外国に住んでいるだとか、がやがやと一斉に盛り、会話に置き去りにされた私は知らず内に超人設定にされていた。

「おもしろいねっ。ねえ、いっしょに遊んでよ」

勢いに手を引かれてベンチを立ち上がる。私は一気に子どもの波に吞まれていった。

人からこんなふうに接されたのは初めてだった。だが、子どもに好かれるのは悪い気はしなかった。

むしろ、こんな近くであゆちゃんに手を握られているだなんて、と心臓の鼓動が強まっていた。手のひらに滲んだ汗に気付かれないようにするのが大変だった。

「ブランコ漕いでよ!!」

私はされるがままに、遊具の場所まで背中を押されていった。

鎖で吊るされたタイヤのブランコに、子どもたちは一斉に乗りかった。

「はやくこいでっ」

あゆちゃんに催促された私は、本当は内心すごい喜んでいながらも、「仕方がないなあ……」と言い、『本当は少し疲れていますけどね』みたいな、せこいニュアンスを込めてはブランコを揺らした。大きく揺れる遊具に子どもたちは大はしゃぎしている。その合間に、私は公園の一角に潜む母親集団に視線を配った。仲良くお喋りを続けている彼女たち。私の存在に気付いていながらも、特にこちらを不審に思っていないようだ。上下ジャージという爽やかさが功を奏しているのか、「子ども好きな青年」という感じに受けているのかもしれない。

これは私にとって好機だ。そして、あの日の行動が間違っていないことを実感する。今まで接することすら絶望的だったのに、迷子のあゆちゃんを送り届けたおかげで一発逆転の状況に立ったのだ。

私は興奮して勢いよく両手でブランコを揺らし、子ども好きを装いながら「よっしゃー!!」と内心でガッツポーズしていた。

「それじゃ、今日もよろしく願いますね」

いくつかの月日経ち、私はいつもの公園に来ていた。

こちらに向けてニッコリと笑顔を送る女性は、公園の片隅に溜まる母親集団の一人で、リーダー格の存在だった。

ジャージ姿で帽子を深く被った私はその場で一礼し、子どもを公園に預けて繁華街へと出かける数人の母親たちを後ろから見送った。あれから公園に通う中、子どもたちに触れる機会に恵まれた私は「物好きな青年」として子守を任されるほどに母親集団の信頼を得

ていた。

ブラック会社に入社して以来、疲れで顔かたちが変わるほどにやつれたというが、楽しくてしょうがない今では輝いた日常を送っている。

おかげで笑顔が身についたのか、仕事も順調に客が増えてきている。セールスに重要だったのは笑顔だったのだ。気づいたときには私はあゆちゃんや子どもたちに救われていた。

「ねえー、今日はなにをしてあそぶの??」

あゆちゃんが私の手を取ってニコニコと笑っている。

この世界で一番大切なものを、私は教えてもらった気がする。

握られた手のひらは、初春の寒さに負けないくらい温かった。

子どもの体温は大人より高いというのを知ったのも、つい最近のことだ。

「今日はボールを持ってきたから、みんなでドッジボールをしよう」
こうして子どもたちを集めて、私は審判役でドッジボールを始めた。地面に引かれた線は子どもが靴で引きずったもので、少々歪んでいた。斜めに傾いている。それをみて小学校時代によく校庭で球技をしていた頃のことを思い出し、私はしばらく懐かしさに浸っていた。

上を見上げれば、涙が出そうなくらい青空だった。

こうして、あゆちゃんや他の子どもたちと遊んだ日のことを思えば、多少の残業や説教も苦じやないような気がした。

「うわー、当たっちゃったー!!」

えへへ、と洋服に土を付けて無邪気に笑うあゆちゃん。それを見て私は自然と和らげな笑みをこぼしていた。

彼女に出会ってから、私の人生は百八十度向きが変わった。

そして、一つ分かったことがある。子どもは不思議な力を持っていた。それはこの暗い社会には備わっていない“何か”。成長する過程で失ったその大きな力に、私たち大人は呆気無く左右されてし

まうのだ。

それは子どもの内に潜む魔物だと、誰かは言う。けれど、それは単なる純粹さだと、誰かが言う。

故に、子どもの世界は狭い。だが、純粹であるおかげで、一番大切なものしか映っていないのだ。

この子たちの目には、いったい何が見えているのか。

「お兄さんも一緒にやろーよっ」

どうか、連れて行つて欲しい。

あゆちゃんに手を引かれるがままに、私はその輪の中に入ってしまった。

「お母さん、遅いね」

ブランコに腰をかけるあゆちゃんに、後ろからそう声をかけた。

「うん……」

他の子はみんな迎えが来て、手を振って帰っていった。

しかし、あゆちゃんの母親はいつまで経っても迎えに来ない。

「なにしてるんだろっ、ママおそいなあ……」

あゆちゃんは不満そうに唇を尖らせる。

そんな姿に私はくすりと笑みをこぼし、そのままブランコを漕いであげた。

そして、あゆちゃんが揺れるたびに、その髪がオレンジ色の陽光にさらさらと輝いた。

「寒いね」

私は少し上を見上げて言った。楽しいひとときの終わりを告げるように、空には夕暮れが一面に広がっていた。

あゆちゃんの不安を煽るように、冷たい風がビュビュウと吹き始めた。

「また、遊ぼうね」

さりげなく、それでいて優しげな口調で言えただろうか。

そんな時、ジャージのポケットに振動を感じた。母からの着信だ

った。

「紗香さん、離婚したいって」

「……」

「別の男性がね、居るって」

「……うん」

「だからね、言いづらいから、代わりに言っただけだって頼まれたのよ」

「わかったよ」

そう言い放って、通話を切った。

何かを感じ取ったのか、こちらを振り向いたあゆちゃんが怪訝そうに私を見据えた。

「誰からでんわだった？」

「お母さんだよ」

「そうなんだ」

ギィ……とブランコを支える柱が軋んだ。

「ねえ、あゆちゃん」

「んう？」

「いつかまた、遊ぼうね」

「うん。……また、くる？」

「もちろん」

「ぜったい？」

私は、ニツコリと笑って言う。

「あゆちゃんのこと、好きだからね」

後ろで、風に吹かれた木の葉が一斉に音を奏でた。

「……」

彼女は突然と私に背を向けたまま、しばらく黙り、

「……ほんと？」

こちらに向き直った。

私は優しく口元を緩ませて、静かに頷いた。

「あっ、ママだー！！」

あゆちゃんはブランコから立ち上がり、母親の元へと駆けていった。

私は深く帽子を被り、素性を知られないようあゆちゃんの母親のところへ寄っていった。

「すみませんー、こんな遅くまで付き合わせてしまって」

紗香は申し訳なさそうに、私に向けてお辞儀した。

私は声色を変えて「いや、いいんですよ」と言った。

「それじゃ、あゆちゃん帰りましょ」

「——うんっ！！」

紗香と歩華は、仲良さそうに手を繋ぎ公園の外へと歩いた。

そこだけ時間の流れが違うかのように寄り添う親子を、私は見守っていた。

後ろ姿に映る、あの子の横顔。

あの日、この場所で、私に向けてくれたその笑顔を、歩華はずっと絶やさない。

夕暮れに照らされた公園の土に落ちた、二人の影。

それは、澄んだ空に向かって大きく背伸びしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4743p/>

あの日、あの場所で、私は女子園児に恋をした。

2010年12月13日11時55分発行